

令和3年度 北海道教育大学札幌校

教員養成課程

私費外国人入試

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 この問題冊子は3ページ、解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。
- 3 「問1」「問2」すべてに解答すること。
- 4 解答用紙は、「問1」「問2」それぞれ1枚あります。
- 5 解答は解答用紙に横書きとし、句読点及び段落の空白も1文字とし、指定された字数内でまとめること。ただし、題・氏名は記入しないこと。
- 6 受験番号は、解答用紙の指定欄に記入すること。
- 7 解答用紙2枚を提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
- 8 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、問1と問2に答えなさい。

何かが最初から完璧にできる人はいない。あることを繰り返し経験していれば、初めてやってみた時に比べ、自分の行動が変わっていることは誰でも様々なことで経験しているだろう。

例えば、料理のことを考えてみよう。料理をまったくしたことのない人は、そもそも、自分でどのような材料でどのような料理をつくるのか考えることが難しい。料理本などのレシピを見ながらチャレンジしてみる。最初は何の食材をどの形にどのくらいの厚さに切ればよいかもよくわからない。切るスピードも遅く、形も厚さも不揃いになってしまう。「お好みに応じて醤油を適量」と書かれていると「適量」がどのくらいなのか見当がつかない。

それが経験を積むにつれ、包丁の使い方も上手くなり、最初に比べて速く、きれいに切れるようになる。味見をしながら好みの味にするために調味料を加減できるようにもなる。料理の本のレシピどおりの材料がなくても、家にある食材でつくったり、別の食材で代用したり、ということもできるようになる。

ここまでいくと、もはや料理の熟達者といってよいだろう。しかし、上には上がいる。普通の人が普通の家庭の食事を手早くつくれる熟達のレベルと、プロの料理人に要求される熟達のレベルとはまったく異なる。もちろん、プロの料理人の中でもその腕前には個人差がある。他の人には真似できない、その人独自の「何か」がなければ一流の料理人とはいえない。

同じようなことは言語の学習でもいえる。母国語を流暢に話したり読んだりできるようになることは立派な熟達であるが、それは十分に経験を積めば誰もが達成できる熟達だ。そこからさらに俳句や詩、小説、ノンフィクションなどのジャンルで自分にしか書けないスタイルの文章を書くことのできる文筆家、言語の分析をする言語学者、プロの編集者など、多くの人がそれぞれの分野でことばを武器に道を究めていく。

つまり、熟達といっても、経験を積むことで、最初はできなかったことが素早く、よどみなく、正確にできるようになるというレベルの熟達と、それを超えて、その分野で一流となり、さらに超一流になるレベルの熟達とがある。もちろん、これは連続する過程なのだが、熟達者の認知の特徴や学び方の特徴を考えるとときにはここを分けて考えることが重要だ。

出典：今井むつみ『学びとは何か―〈探究人〉になるために』岩波新書,pp.97-98,2016.

問1 文中の事例を取り上げて、熟達の二つのレベルについて、300字以上400字以内で説明しなさい。(100点)

問2 学校教育では、熟達の二つのレベルのうち、どちらを目指すべきでしょうか。あなたの考えを500字以上600字以内で述べなさい。(200点)